

## An Analysis of Clause-particles *Mono no* and *Mono o* — From the Pragmatic Point of View

Yasuo Murayama

Clause-particles *mono no* and *mono o* both indicate a contrast between  $S_1$  and  $S_2$  and are almost equivalent to the English “but” or “although”. *Mono o*, adding to that meaning, indicates resentment or complaint. It is also used when  $S_1$  indicates the reason for  $S_2$ , meaning “since”, “as”.

In this paper, we will look at these particles from the pragmatic point of view. *Mono o* indicates the speaker's resentment at, or dissatisfaction with the situation in  $S_2$ , while *mono no* shows the speaker's regret about, reflection on or resignation to the situation. Therefore, we can say that the speaker's feeling is toward the outside when using the former particle, whereas it is toward the inside when using the latter.

It will also be explained why *mono o*, when it is used to indicate the reason for  $S_2$ , is replaced by (*noda*) *mono*.

## 接続助詞「ものの」、「ものを」の分析

—— 語用論の観点から ——

村 山 康 雄

### 0. はじめに

「ものの」、「ものを」は共に、前件と後件が相入れないことを示す逆説条件の接続助詞である。これまでこれらの助詞の意味についてはいくつかの研究がなされているが、本稿では語用論の観点からこの二つの語の意味の違いを考える。また、「ものを」と「(のだ)もの」との関係についても触れる。

### 1. これまでの分析

#### 1.1. 「ものの」

##### 1.1.1. 接続・意味

「ものの」は形式名詞「もの」に、格助詞「の」が付いたもので、活用語の連体形に接続する。

前件である事態・状態の成立を認めながらも、後件でそれから予想されるのとは相反する事態・状態が成立するとき用いられる逆接条件を表す接続助詞である。「～は本当だが、しかし…」の意味を表し、多くの場合、「が」、「けれども」で置き換えることができる。

また、下記の用例(7)のように前件に強調の「は」が入ることもある。(8)、(9)のように、「ようなものの」、「とはいうものの」の形で慣用的に用いることもある。

### 1.1.2. 用例

- (1) ずいぶん長い間英語を学んだものの、なかなか上達しない。
- (2) 努力したものの、落第してしまった。
- (3) 今卒論で苦しいものの、あとわずかで卒業だ。
- (4) この辺りは静かなものの、交通が不便だ。
- (5) 彼女に声をかけようとしたものの、恥ずかしくてやめた。
- (6) あいつとはよくけんかするものの、無二の親友だ。
- (7) とりあえずコンピューターを買いはしたものの、使い方が分からない。
- (8) 軽い怪我で済んだからいいようなものの、まかりまちがえば大事故になるところだった。
- (9) あの人には私たちに親切にしてくれるとはいっても、実は相当な悪だそうだから、決して気を許してはいけない。

## 1.2. 「ものを」

### 1.2.1. 接続・意味

「ものを」は形式名詞「もの」に、古語の間投助詞「を」が付いたもので、活用語の連体形に接続する。

前件からは予想できない・反対の結果が後件に続くことを、不満・非難・怒りの気持ちを込めて表す逆接の接続助詞である。<sup>1</sup>「のに」に置き換えることができる場合が多い。(12)のように、内容が分脈から分かっている場合には後件が省略されることもある。

また、「ものを」には用例(17)－(19)のように前件を後件の根拠・理由として提示し、後件に続けるという順接の用法もある。この意味では「から」で置き換えることができる。

1.2.2. 用例

- (10) いやならいやだと言えばいいものを、どうして我慢していたんだ。
- (11) もっと早く取りかかれば時間内にできたものを、なにをぐずぐずしていたんだ。
- (12) 一生懸命努力していれば合格していたものを。
- (13) こんなに君のためにつくしているものを、どうして分かってくれないのか。
- (14) あんなに欲しがっていたものを、せっかく買ってきてやったのに。
- (15) ぼくのような運動音痴でさえやっているものを、なぜ君のようなスポーツマンが挑戦しないのか。
- (16) 教えて欲しければ教えてあげたものを、ぼくのところに来なかったから、他の人に聞いたのかと思っていた。
- (17) あんな小さな子供でさえできるものを、ぼくもがんばらなくては。
- (18) これほど多くの賛同者がいるものを、全く無視できるわけがない。
- (19) これほど一生懸命努力しているものを、なんとか助けてやろうじゃないか。

2. 語用論の観点から見た「ものの」、「ものを」

2.1. 「ものを」

1.2.1で「ものを」には不満・非難などの気持ちが込められていることを見たが、具体的にそのことを示そう。

- (20) ちょっと図書館に行けば分かるものを、愚かなことにも手間を惜しんで、なぜ君は自分で調べようとしないのか。
- (21) こんなに病気で苦しんでいるものを、けしからんことには、クラスの誰も見舞いに来ない。

- (22) こんなに暑いものを、気がきかない馬鹿共め、なぜ窓を開けないのか。

上記の例が示すように、「ものを」を用いた文の後件には非難などの話し手の感情を表す表現が現れることができる。<sup>2</sup>

## 2.2. 「ものの」

それでは「ものの」には「ものを」が持っているような話し手の気持ちは含まれないのだろうか。

- (23) その件は一応話しはついたものの、残念ながらまだ多くの未解決の問題が残っている。
- (24) 父さんと話し合ったものの、なぜか考え方が根本的に違う。
- (25) 彼を説得しようと努力したものの、なんと言ったら良いのか全く話を通じなかった。

上記の用例が示すように、「ものの」が用いられると、後件に「残念ながら」のような表現が現れることができる。つまり話し手のあきらめ・残念さなどの否定的な気持ちが込められている場合があるように思われる。<sup>3</sup>

「残念ながら」は当然だが、「なぜか」なども否定的な意味合いを持つ語である。<sup>4</sup>

- (26) 努力したけど、なぜかダメだった。
- (27) \*努力したので、なぜか合格した。
- (28) なんと言ったら良いのか、(申し訳ないが) 明日は伺えません。
- (29) \*なんと言ったら良いのか、(喜んで) 明日伺います。

## 2.3. 「ものを」／「ものの」の相違——「外」／「内」への感情

「ものを」は話し手の非難などの気持ち、「ものの」はあきらめの気持ち、共に否定的な意味合いを含むが、さらに以下の用例を見てみよう。

(30) {あいつ/\*?ぼく} はパチンコで大儲けしたものを、愚かなことをするものだ、すぐに使ってしまった。

(31) {ぼく/友人} はパチンコで大儲けしたものの、愚かなことには、すぐに使ってしまった。

「ものを」は非難などを表すことを見てきた。非難とは他人の行為に対して行われるもので、自分自身の行為に対しては反省を行うことはできても非難することはおかしい。それ故(30)で示されるように、「ものを」は話し手自身の行為に関することには使いにくい。つまり「ものを」は感情が「外」に向けた語であると言えよう。

他方(31)で、「ものの」は話し手の自分自身(ぼく)の行為に対する愚かなことをしたという後悔・反省の気持ち、あるいは他人(彼)の行為に対する愚かなことをするものだという感想を述べているに過ぎない。(23)－(25)にも見られるように、話し手が、ある事態に対してあきらめ・後悔・反省などの否定的な見解を単に持っているだけであることを示す。他人の行為、ある事態に対して積極的に自分の感情を向けているわけではない。つまり、感情が「内」に向けた語であると言えよう。

(32)と(33)とを比較してみよう。

(32) 何度も催促したものの、{残念ながら/?けしからんことには} 彼は会議に出て来なかった。(話し手の、彼の行為に対するコメント)

(33) 何度も催促したものを、{けしからんことには/?残念ながら} 彼は会議に出て来なかった。(話し手の、彼の行為に対する非難)

### 3. 「ものを」、「(のだ)もの」

1.2.1で「ものを」が順接を表す場合もあることを見た。

(34) みんなでやろうと言っているものを、ぼくたちも協力しなければ。

この場合、「ものを」は前件が後件の根拠・理由を表すので、ほぼ同じ意味を持つ接続助詞の「もの」に置き換えることができる。<sup>5</sup>

(35) みんなでやろうと言っているもの、ぼくたちも協力しなければ。  
また、この理由を表す性質から同じく理由・根拠を強調する断定の「のだ」に付く。

(36) みんなでやろうと言っているのだもの、ぼくたちも協力しなければ。

#### 4. まとめ

はじめに、これまで行われた「ものの」、「ものを」の分析を見た。次にこれらの語を語用論の観点から見、「ものを」は事態に対する話し手の非難などを表す、感情が「外」に向いた語であり、他方「ものの」はあきらめなどを表す、「内」に向いた語であることを示した。最後に「ものを」が順接で用いられる場合には、その根拠・理由を表す意味から「(のだ)もの」に置き換えられる理由を示した。

注

- 1) 『日本文法大辞典』のようにこれまでの研究には、前件で不満などの気持ちを表すと説明するものがあるが、次の例に見られるように、むしろ後件で表すと考えた方が良いと思われる。

ぼくがあれほど忠告したものを、どうして耳を貸そうとしないのか。  
ここでは「ものを」は、前件の「ぼくが忠告した」行為に対してではなく、後件の「君がそれを無視する」行為に対して、話し手（ぼく）が不満・非難の気持ちを持っていることを示す。それ故、本稿では後件にこのような気持ちが表されていると考える。

- 2) 注1を参照。  
3) 「ものの」はあらゆる場合にきりめなどの気持ちを表すと言っているのではなく、単にこのような場合が多いと言っているだけである。  
4) このような否定的意味合いを含む語には「あまり」などがある。

あまり食べないで下さい。

\*あまり食べて下さい。

あまり食べすぎると、お腹をこわすよ。

- 5) 『日本文法大辞典』は以下の文を逆接を表すと述べているが、順接とも考えられる。

先生だって知らなかったもの(を)、ぼくが知っているはずがないだろう。  
確かに、この「ものを」は逆接の「のに」に置き換えることができる。

先生だって知らなかったのに、…

しかし、同時に順接の「から」にも置き換えられる。

先生だった知らなかったのだから、…

この例のように、後件に「～のはずがない」、「～のわけがない」のような判断を表す表現が現れると逆説、順接とも取れる。

参考文献

- 伊藤 勲 (1994) 「「ものの」の用法」『紀要』第16・17号  
国際学友会日本語学校
- 松村 明編 (1971) 『日本文法大辞典』明治書院
- 松村 明編 (1988) 『大辞林』三省堂
- McGloin, Naomi Hanaoka(1976-77) “The speaker’s attitude and the conditionals *to*, *tara* and *ba*”. *Papers in Japanese Linguistics* 5
- 佐竹久仁子 (1984) 「～もので/～ものの/～ものを」『日本語学』  
Vol. 3 No.10 明治書院
- 山内洋一郎 (1970) 「が・に・を・ものから・ものの・ものを・〈から〉・  
〈ので〉・〈のに〉」『国文学 解釈と鑑賞』35-13 学燈社
- 横林 宙世、下村 彰子 (1988) 『接続の表現』荒竹出版